日本伝統音楽研究センター 第38回公開講座

雅楽 時空をこえた出会い

遠州の小京都 森町の舞楽 × 古代中世雅楽譜の解読

と　き	平成26年9月14日(日)　午後12時30分開場・午後1時00分開演
ところ	京都市西文化会館ウエスティホール (京都市西京区上桂森下町31-1阪急上桂駅下車)
演　出	小國神社古式舞楽保存会 天宮神社十二段舞楽保存会 でんおん管絃講(京都市立芸術大学学生教職員有志)
企画構成	田鍬智志(日本伝統音楽研究センター准教授)
参加費	¥1,000(ただし高校生以下および京都市立芸術大学 学部/大学院生は無料。 申込時に【学生】と銘記し、当日受付にて学生証を提示して下さい。)

遠州一宮、小國・天宮両社に伝わる「十二段舞楽」。その笛の音は、私たちがよく耳にする雅楽とは似ても似つかない、とても素朴なメロディー。地方化した雅楽といった印象。でも実は、それこそが古代中世の都の雅楽の面影です。

中央の雅楽が極端なまでに洗練化してしまう以前またはその途次の音楽様式が、遠州森の地に根付き、そして中央の進化にとり残されるかたちでこんにちまで伝えられてきました。

今回は、遠州森の十二段舞楽と、平安末期・鎌倉期の雅楽古譜から再現した音楽とをシンクロナイズしてみます。

それは中央と地方、古代中世と現在いう時と場所を超えた音楽の出会い。

プログラム

小國神社伝承	〈連舞〉			
天宮神社伝承	〈色香の急〉	X	古楽譜解読による	〈迦陵頻急〉
小國神社伝承	〈蝶の舞の急〉	X	古楽譜解読による	〈胡蝶楽急〉
天宮神社伝承	〈太平楽の急〉	X	現行雅楽	〈太平楽急〉
小國神社伝承	〈新まく〉	X	古楽譜解読による	〈新靺鞨〉
天宮神社伝承	〈納曽利の急〉	X	古楽譜解読による	〈納曽利急〉

主催　主催京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター
共催　京都市立芸術大学芸術資源研究センター
助成　京都市西文化会館ウエスティ
(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)
協力　森町教育委員会社会教育課
森町文化協会

申込方法
はがき、FAX、Eメールのいずれかの方法により、①郵便番号、②住所、③氏名、④電話番号(FAX番号)、⑤「第38回公開講座観覧希望」とご記入のうえ、お申込みください。※定員に達した時点で募集を締め切ります。

申込先
京都市立芸術大学 事務局 連携推進課 (事業推進担当) (新研究棟6階)
〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町13-6　電話：075-334-2204　FAX：075-334-2241　Eメール：public@kcua.ac.jp

京都市立芸術大学
Kyoto City University of Arts ~founded in 1880~

① いまの雅楽は平安時代の雅楽ではない？

遣唐使廃止（894）以前に中国大陸や朝鮮半島から日本にもたらされた雅楽は、日本風にアレンジが加えられ、10世紀頃には、ほぼ今わたしたちが知っているような音楽へと変貌し、こんにちまで伝承されてきた、と一般に理解されています。しかし、平家物語、源氏物語や今昔物語など、中古・中世の文学や日記などには、専ら伴奏音型しか奏していないはずの絃楽器（箏・琵琶）を一人あるいは数人で日常的に演奏していたり、今では考えられないほど一日で行われた演目数や演奏リピート回数が多い、など不可解なことだらけです。
つまり、それらは中世以前の雅楽が今とは全く違う音楽だったことを示唆しているのです。民族音楽学者ローレンス・ピッケン（Laurence Picken 1909-2007）は、今の雅楽のゆったりとした音の進行のなかに、舶来した当時の大陸的・歌謡的なメロディーが潜んでいることを発見しました。すなわち、雅楽は、千年以上の歳月をかけて、何倍も、曲によっては10数倍も“まのび”したというのです。伴奏的で旋律を奏しているとはとても思えない箏や琵琶のパートを時間を頗るつめて奏すと、不思議なことにポップな旋律が浮かび上がってきます。それこそが、中世以前の雅楽の旋律。
そしてこんにちに伝わる森町の十二段舞楽のいくつかの曲に、そういった前中世的雅楽旋律を聴くことができます。

雅楽 時空をこえた出会い

日本伝統音楽研究センター 第38回公開講座

遠州の小京都 森町の舞楽 × 古代中世雅楽譜の解読

② 平安・鎌倉時代の雅楽譜から当時の雅楽を再現する

概していえば、一千年の歳月をかけて“まのび”したのではありますが、かといって、現行の雅楽を高速再生すれば、平安・鎌倉時代の雅楽になるわけではありません。奏法や音階構造が各時代ちがいますので、それぞれの時代の雅楽を再現するには、楽譜や楽書史料を検証する必要があります。当センターでは、2010年より、平安末期・鎌倉期の史料から、当時の音楽様式を解明（推定）し再現する試みをおこなっています。

③ 遠州一宮小國神社と天宮神社の十二段舞楽とは？

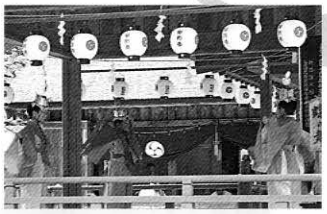
遠州一宮小國神社および摂社天宮神社にそれぞれ「十二段舞楽」が伝承されています。社伝によれば、古代に勅使参向によって舞楽が奉じられたとされます。記録の上では、天正18年（1590）の『遠州小國一宮天宮神領之事』に、舞稚児が寺に籠り稽古をする舞堂屋のことが記されています。社僧によって掌握されてきた舞楽は江戸時代にはいり、鈴木左近が楽家となって両社の舞楽の指導にあたりました。明治以降は、それぞれの氏子が保存会を結成しこんにちに伝えています。
演目は両社とも、①連舞（延舞）・②色香・③蝶の舞（庭胡蝶）・④鳥の舞（鳥名）・⑤太平楽・⑥新まく（新靺鞨）・⑦安摩・⑧二の舞・⑨陵王・⑩抜頭・⑪納蘇利（納曾利）・⑫獅子の12演目です。両社の舞楽は、舞動作や笛の旋律などに関しては、ほぼ同じですが、若干の違いがみられます。装束の色は、演目のジャンルとは関係なく、小國は左方の赤系、天宮は右方の緑系で統一されています。本公演では、小國・天宮それぞれに3演目ずつ演じていただきます。

連　舞（小國神社　稚児2人舞）

天宮神社では《延舞》と表記します。中央の《振鉾》に相当する舞で、稚児2人が鉾を持って舞う清めの舞です。曲は〈乱声〉を用います。現行中央の〈乱声〉のように、笛奏者各々がタイミングをずらして奏することはしません。ヒャラヒャラヒャラというトリル奏法が特徴的で、ヒグラシが一斉に鳴くような効果があります。おそらくは、それがかつての〝乱声〟ではないでしょうか。

色　香（天宮神社　大人2人舞）

菩薩面をつけ、日輪・月輪を背負い、サンジョウ（桴）を持って舞います。中央の廃絶舞楽《菩薩》の遺例です。曲は、乱声・音取・序・急からなります（当公演では序を省略）。急は《鳥名（鳥の舞）の急》の旋律を共用します。この曲の旋律は、古代中世の雅楽譜から読み解いた《迦陵頻急》の音楽ほぼそのもの。



蝶の舞　（小國神社　稚児4人舞）

天宮神社では〈庭胡蝶〉と呼ばれます。中央の童舞《胡蝶（胡蝶楽）》に相当します。曲は、乱声・音取・序（トーリャハ）・急（チュウーラリ）からなり、本公演では、乱声、急のみ奏します。古楽譜から再現した《胡蝶楽急》は愛らしいメロディー。当地の急の曲は、部分的ではありますが、中世のフレーズを遺しています。

太平楽　（天宮神社　太刀4人舞）

曲は序と急からなります（本日は序を略します）。「太刀」とよばれる稚児よりも年上の舞童によって舞われます。鉾と太刀を持って、舞唱歌を唱えながら舞います。急の最後は「太刀の一」（第一舞童）のみ舞台に残って「太刀の一人舞」をします。急の曲については、こんにちの中央の《太平楽急》龍笛旋律との類似性が小野功龍氏により指摘されています。

新まく　（小國神社　稚児4人舞）

天宮神社では《新靺鞨》と表記します。中央の舞楽《新靺鞨》に相当します。『教訓抄』（1233）が書かれた当時は、散楽のような「浅猿事」の舞だったようです。たしかにこの曲を古譜から再現すると、とってもコミカル！森町の新まく旋律は、そのような諧謔的性格がかなり色あせた感がありますが、前中世的旋律といってもよいでしょう。

納曾利　（天宮神社　大人1人舞）

小國神社は《納蘇利》と表記します。中央の同名の舞楽に相当します。曲は、序と急からなり、当公演では急のみ演奏します。急の曲は、現行中央の《納曽利急》高麗笛旋律によく似ています。一方で古譜から解釈しおこした同曲の旋律とも類似しています。つまり、中央も森町も《納曽利急》に関しては古今通じてあまり変化していないといえます。

（演目等は予告なく変更させていただく場合がございます。あらかじめご了承下さい。）

京都市西文化会館　ウエスティホール　アクセス

電車でご来館の場合
阪急嵐山線　上桂駅から徒歩１５分

バスでご来館の場合
京都市バス
「千代原口」（嵯峨街道）下車約６分（２９・６９系統）
「桂中学前」（嵯峨街道）下車約６分（２９・６９系統）
「平和台町」（国道９号）下車約５分（７３系統）
「千代原口」（国道９号）下車約１０分（７３系統）
京阪京都交通バス
「千代原口」（国道９号）下車約１０分
※駐車場（有料）はスペースに限りがありますので、
公共の交通機関をご利用ください

④ そして、十二段舞楽と 平安・鎌倉時代雅楽譜より再現した音楽との合奏を試みる

今回の公演では、〈色香の急（鳥の舞の急）〉〈蝶の舞の急〉〈新まく〉〈納曾利の急〉の4曲において、古楽譜解読による演奏との合奏を試みます。といっても、ピタリと合うわけではありません。十二段舞楽の皆さんにはいつも通りの演奏をしていただき、古楽譜解釈演奏のほうで、フレーズの順序を変えたり、リズムを調整して、十二段舞楽に合うように演奏してみます。また、〈太平楽の急〉は、すこし趣の異なる旋律で、おそらくは他の曲とは時代の異なる旋律です。この曲は、中央の現行雅楽〈太平楽急〉に近い旋律となっています。今回は、現行〈太平楽急〉との合奏をこころみます。